

予備校の機能分化と学力

木村 好美（大阪大学大学院 人間科学研究科）

1. 問題

予備校・学習塾など民間教育産業を問題視する言説が数多く見られることはしばしば指摘されている（[1][2]等）。これらの言説に対し、民間教育産業の実態や、民間教育産業利用者の意識を踏まえた上で、学校と民間教育産業の関係を捉え直そうとする実証的な研究（[3][5]等）が1980年代後半からみられるようになった。

なかでも学習塾に関しては、中学・高校入試、学校、階層との関連などの研究がなされている（[5]等）が、予備校についての研究は「浪人生」を対象としたものや、予備校講師から見た「予備校像」についてのものが多く（[2][4]等）、「予備校に通う高校生」がどのように予備校を認識しているかについての研究はほとんど見られない。浪人生の場合は、高校を卒業してしまい、所属する場が無いので「居場所」を求めて予備校に通うことも考えられるが、高校生はそうではない。彼らは、学校という帰属対象があるにもかかわらず予備校に通うのである。そのため、学校・予備校の両方に通う高校生がどのように予備校を認識しているかを知ることが、高校教育や今後の入試制度を考える上で非常に重要なことであるといえるだろう。

本報告では、全国型の大手予備校である河合塾で得たデータを基に、「予備校に通う高校生」がどのように予備校を認識しているかについて分析する。特に、学力レベルによって予備校の認識に差異がみられるのかどうかを予備校の標榜する機能との関連から明らかにする。

2. 予備校の標榜する機能

予備校の機能に関しては、入試対策のための諸機能（成績向上、情報収集等）以外に入試競争激化・序列化の促進など様々なものが考えられる。しかし、本報告では「予備校に通う高校生」の予備校認識を知ることが目的とするため、まず予備校側が高校生に対しどのように自らをアピールしているのか－予備校側が自らをどのように位置づけているのかを確認しておく必要があるだろう。そのため、いわゆる「御三家」と呼ばれている河合塾・駿台予備学校・代々木ゼミナールの入学案内パンフレットから予備校が自らをどのように位置づけているのか整理してみよう。

優秀な教授・快適な学習環境・タイムリーな入試情報という3点が、どの予備校の入学案内パンフレットにおいても強調されているが、予備校の標榜する機能は次の4点に大別される。

- ① 教養機能＝受験テクニックの伝授ではなく、学問への興味・関心を喚起する機能。文化行事・教養的単科ゼミ、「あなたの知らない世界や新しい世界に触れる機会」を作る講師など。
- ② 受験対策機能＝受験テクニックの習得に関連する機能。「最新の入試動向を徹底分析して作成された専用テキ

スト」、「学力向上へと確実に導くスペシャリストの講師」など。

- ③ サポート機能＝①②と異なり、授業内容・講師と関係のない、受験生をサポートする機能。「快適な受験ライフを約束する最新施設最新設備」などの環境整備、チューター・学習アドバイザー制度、など。
- ④ 情報機能＝模擬試験、大学入試説明会、入試情報提供など。

②～④までは「大学入試対策」のためのものであるが、①は大学入試とは特に関係が無い。①の「教養機能」は社史・会社案内においても強調されており、「予備校＝受験のため」という図式に対し、予備校は受験対策以上のものを提供するのだ、と述べている。

そこで、以下の分析では、予備校の標榜する機能のうち、入試に直接関連しない教養機能が高校生にどのように認識されているのか、学力レベルによって認識の仕方が異なるのかを検証する。これにより、単なる入試対策以上の機能を予備校が果たしているのかどうか明らかになるであろう。

3. データの概要

調査対象者 …「河合塾」の大阪府下にある校舎（大阪校・大阪南校）に通う高校2年生1,655名。

調査実施期間…大阪校 1995年10月上旬
大阪南校 1995年11月上旬

調査方法 …集合自記式（授業開始前に配布し、授業終了後に回収）

回収率 …62.2%（配布票1,548票、回収票963票。
大阪府下の河合塾高校2年塾生の58.2%から回答を得た。）

表1 回答者の性別

男性	女性	不明	計
551(57.2%)	408(42.3%)	4(0.5%)	963

4. 予備校の機能と学力に関する分析

予備校に通う高校生がどのように予備校を認識しているか明らかにするために、予備校認識に関する質問項目について、男女別・学力別に因子分析を行った。紙幅の都合上、ここでは男性の結果のみ述べることにする。男性の分析結果は、表2・3のとおりである。なお、レベル1は予備校の英語の授業において成績上位クラスに在籍している者、レベル2は下位クラスに在籍している者である。

表2を見ると、レベル1の第1因子は「受験のための勉強をする」「勉強への興味を抱かせる」「能力に適した指導を行う」「応用学力をつける」「入試に関する情報を得る」

「知的好奇心を満たす」という、受験関連および教養機能的な 6 項目で因子負荷量が大きい。ここでいう教養とは、知的なものが中心であるから、この因子を「総合的な学力育成」と呼ぼう。これに対し、第 2 因子は「社会の規則を身につける」「人間の幅を広げる」という受験に関係の無い、社会性育成・人間形成に関する 2 項目で因子負荷量が大きいため、「生活教育」とする。

表 2 予備校認識の因子パターン (男性・レベル 1)

質問項目	因子 1	因子 2
1 受験のための勉強をする	.615	-.224
2 息抜きができる	-.041	.356
3 勉強への興味を抱かせる	.569	.325
4 社会の規則を身につける	-.089	.701
5 能力に適した指導を行う	.432	.201
6 応用学力をつける	.696	-.075
7 入試に関する情報を得る	.772	-.224
8 人間の幅を広げる	-.001	.698
9 基礎学力をつける	.191	.101
10 知的好奇心を満たす	.432	.360
11 進学のため通わねばならぬ	.232	.119
固有値	2.540	1.243
寄与率 (%)	23.1	11.3
累積寄与率 (%)	23.1	34.4

主因子解、抽出基準固有値 1、promax 回転

表 3 予備校認識の因子パターン (男性・レベル 2)

質問項目	因子 1	因子 2
1 受験のための勉強をする	-.197	.507
2 息抜きができる	.371	-.367
3 勉強への興味を抱かせる	.459	.103
4 社会の規則を身につける	.569	-.149
5 能力に適した指導を行う	.523	.108
6 応用学力をつける	.151	.794
7 入試に関する情報を得る	.172	.636
8 人間の幅を広げる	.628	-.195
9 基礎学力をつける	.357	-.019
10 知的好奇心を満たす	.639	.083
11 進学のため通わねばならぬ	.206	.114
固有値	2.288	1.226
寄与率 (%)	20.8	11.1
累積寄与率 (%)	20.8	31.9

主因子解、抽出基準固有値 1、promax 回転

次に表 3 より、レベル 2 の因子パターンを確認しよう。第 1 因子は「勉強への興味を抱かせる」「社会の規則を身につける」「能力に適した指導を行う」「人間の幅を広げる」「知的好奇心を満たす」という、教養機能的および社会性育成・人間形成に関する 5 項目で因子負荷量が大きい。そのため、この因子を「教養的な生活教育」と名づける。第 2 因子は、「受験のための勉強をする」「応用学力をつける」「入試に関する情報を得る」という、受験関連の 3 項目

のみで因子負荷量が大きく、レベル 1 の「総合的な学力育成」との違いが顕著に現れているため、「受験学力育成」としよう。

分析結果より、予備校に対する認識構造は、大別すると「学力育成」「生活教育」という 2 つの要素により構成されていること、その構成要素は学力レベルにより異なることが明らかになった。

5. 結論

本報告の結論は、以下のとおりである。

- ①予備校に対する認識構造は、大別すると「学力育成」「生活教育」という 2 つの要素により構成されている。
- ②予備校の標榜する教養機能は、学力レベルにより認識の仕方が異なる。上位クラスの生徒は教養機能を学力育成と、下位クラスの生徒は生活教育と重ねて認識する。つまり、予備校は、下位クラスに所属する生徒にとっては従来から指摘されているとおり受験を特殊化させる場であるが、上位クラスの生徒にとっては入試対策にとどまらない学力育成の場であることがわかる。上位クラスの生徒にとっては、予備校での受験勉強は「単なる受験のためだけのもの」では無く、肯定的・前向きに、受験以上の意義を見出せるものであるのに対し、下位クラスの生徒にとっては、予備校での受験勉強はあくまでも受験のためだけのものなのである。

参考文献

- [1]天野 郁夫, 1996,『日本の教育システム』東京大学出版会
- [2]樋口 裕一, 1997,『予備校はなぜおもしろい』日本エグゼクティブ
- [3]市川 昭午, 1995,『学校教育の多様化・弾力化を進めるための外部教育セクターとの連携・協力に関する研究』文部省科研費総合研究(A)研究成果報告書
- [4]Mamoru Tsukada, 1991, Yobiko Life : A Study of the Legitimation Process of Social Stratification in Japan. Berkeley: Institute of East Asian Studies University of California
- [5]結城 忠、佐藤 全、橋迫 和幸, 1987,『学習塾』ぎょうせい